

一八三四年

1

太平洋の暴風雨に見舞われた一週間の後、君がカルメンに出会ったのは、まばゆいばかりの六月の朝だった。君の乗った船はチリの海岸を目の前にしながら、まさに沈没の瀬戸際にあった。幾度となく君は死を覚悟した。けれど今ようやくにして、帆が鉤裂きになった船が文無しのごとくゆつくりとバルパライソの光あふれる湾に入っていくところだ。恋する男が愛する女の体に入っていく時のような息苦しさとなめらかさで。

港に着くと、モロ、君はいつもそれを感じたものだ。どれほどたくさん港を知っていようと！君を受けとめる新しい大地に入りこみながら、君は彼女に恋をする。けれど、数々の嵐の後におとずれた晴れたるその朝、きつとこの恋は今までのそれとは違うものになると自分自身に言ったね。

南半球の冬の天穹は青く澄みわたり、拭いたばかりの窓のように冷たく輝いていた。エーテルに満ちた空気は呼吸をするのも痛いほどさ。この国の厳しい美しさは、人をぎょっとさせる。帆船の甲板から、君は熱心にそれをスケッチした。君はその目で風景を飲みこんでいった。

数時間前、まだ海岸からは遠くはなれた場所で嵐の雲が晴れた時、すっかり雪におおわれたアンデス山脈のはるかなる壁を君は目にしていた。連なる頂の峰々を生まれたばかりの太陽が、銅色の糸で縁取った。それらすべての後ろには、アコンカグア山〔アルゼンチンとチリの国境に位置する南米大陸最高峰〕の広い背がそびえ立つ。いっぽうの肩に傾いだビラミッド型のその頂上は、そのはかりもしれぬ高みより君を見つめ、挑みかかるようだった。旅する画家よ、この世界のはてに何か失くし物でもしたのか？ そう尋ねているかようだった。

旅する画家。航海する画家。馬を駆る画家。馬の画家であったローレンツの息子にして、偉大なる戦争画家ゲオルク・フリーップの曾孫。彼は軍隊の後についてヨーロッパの半分を旅した。祖先は隠れカタリ派で（君はそう吹聴して回った）十七世紀にカタルーニャからフッガー家〔アウクスブルクを中心に金融、鉱山業で栄えた豪商、貴族の一族。スペイン・ハプスブルク家に巨額の貸付をおこなっていた〕に仕えてアウクスブルクに移り住んだ。だが、今では君ヨハン・モリッツ・ルゲンダスが一族最後の旅する画家。そして、たしかに君は、手に入れるより前にうしなった何かを求めて世界のはてまでやって来たんだ。

君はどんな姿をしていただろう（この記憶に残る君の姿を見るならば）。君は背が高かった。金髪の巻き毛を黒いリボンでひとつにまとめていたね。三十三歳、整った目鼻立ち、くすんだ色の肌はカタルーニャ人の祖先のもの、瞳の色は深い青、ウルトラマリンド。旅をしすぎたせいで、あるいはそれを描きすぎたために海が君の目に張りついてしまったかのようだ。ふくらはぎの半分をおおう、ずいぶんくたびれたブーツを履いている。肩におおいがついた袖のある灰色のマントの前は開いている。帽子はメキシコ風に背に掛けている。ペルーのエル・カリャオからバルパライソまで君を運んできた船の船尾楼で、左舷を見やりながら君は立ちつくしていた。人生においていつもそうであったように、画家以外の何者でもない君は左腕に抱えた巨大なスケッチブックに、活気に満ちた湾の光景をもう素描しはじめていた。

いずれ絵として仕上げるために、太平洋側にあるイスパノアメリカの主要な港を君はそのやり方でスケッチしてきた。アカブルコ（メキシコからは這々の体で逃げなくてはならなかった）、パナマ、ブエナベントゥーラ、

グアヤキル……。風景と人々を描くために君は船を降り、それらの場所で数週間、あるいは数カ月を過ごした。それからべつの船が待ちうけていて、君は旅を続ける。カリヤオで乗りこんだ船は南アメリカの海岸を離れて太平洋の沖合百レグアまで入り込み、巨大な弧を描きながら波間を進んできたのだった。それから船は南へと進路を向け、デスベントゥラーダ諸島、続いてフアン・フェルナンデス諸島を眺め、その中のマス・ア・ティエラ島（ロビンソン・クルーソー島）に水を補給するべく立ち寄った。植民地時代の航海者たちの古い航路を、北上するフンボルト海流の強い流れに逆らって旅を続けた。海流がその名を負う男爵が君をそれらの土地から遠ざけようと使喚（しこ）しているのかと君は思った。彼は執拗に君に釘を刺した。「気候の穏やかなチリやアルゼンチンの地方には近づかないことだ。そこには見るべきものなど、何ひとつとしてないのだから！」

ようやく、フアン・フェルナンデス諸島からその海流を横切り、波に弄（もよほ）されながら海を渡ったが、その航海は悲惨で、けっして船酔いなどしたことのない君にしてさえ船外に肝臓を吐き出しかけたほど。くわえて、もう海岸にほど近いというのに、長いこと嵐に見舞われた。一週間にわたって暴風雨が船を北へと押し流し、君がその土地と、そこで待ちうけているものを知ることをもたげ、元いた場所に連れもどそうとしているかのようにだった……。

フンボルト海流が（そして碩学その人が）君の到着を阻んでいた。一週間の嵐が君たちを岸から遠ざけた。そして、知られるかぎりもっとも標高の高い山の険しいシルエットが悪い兆しであるかのように思われた。この土地にやって来てはいけなさと君に告げているかのように……。

君はとても迷信深かったね、モロ。いつだって、そうあらずにはいられなかった。最近ますますひどくなった。自分自身を、父親のアトリエにあって君がおおいに模写し、研究もしたデューラーの版画《騎士と死と悪魔》の中の人物の生まれかわりだと信じるようになった。

槍を肩に掛け、鎧に身を包んだ騎兵がゆっくりと馬を進める。戦地からの、あるいは人生における闘争からの

帰途にあるのか。わからない。ありそうなのは、遠い山の頂に姿を見せる城へと向かっていること。醜惡な姿をした、嘲るような様子の惡魔が騎士の後ろをついて歩いている。そのあいだ、ともに馬を驅る死は騎士の隣にあって砂時計を彼に示している。残された時間を。

遍歴の騎士は自分なのだと君は空想をたくましくした。遠い土地を旅する画家。正直に言ってしまう、惡魔は君の義務と野心であり、いつとて君の性癖や快樂に水を差す奴だと。あげくのはてに君はその横暴な惡魔さえ、ヨーロッパから君に手紙を書きおくり、彼の関心を引くものだけを描くようにと命令や指図を与えるフォン・フンボルト男爵と重ねた。男爵は（ほかのひどいことはさておいても）君を自然主義の、科学的な画家に変えたがった。現実を描く画家に。君は感性にしたがう画家として生まれついたというのに！

そして、版画の中で騎士につきしたがう、冠を戴いた死についてはどうだろう？ ああ、それを説明するのはずっと骨が折れる。君は死というものをそれほどおそれてはいなかった。若者にありがちなように、君はほとんど自分を不死身だと考えていた。ただひとつのことをのぞいて。君の戀愛は遅かれ早かれ、死んでいく。そう、君の心の中で。愛情を感じることがなくなっていた。ひとりの女を好きになるやいなや、けっして欺かれることのない肖像画家の目はスカートがおおっている太すぎるくるぶしを、そうあるべき白さには及んでいない齒を、空疎な言葉をとまなうすこし間の抜けたまなざしを見つけ出してしまふ。肌、そして魂のしみ、肉体と精神における不均衡が君の幻想を殺し、幻滅させる。

まず君の身体が女から離れ、それから心が離れる。そして、しまいには君はすっかり彼女の傍らから逃げださなければならなくなる。それは考え抜かれた防衛反応だっただろうか？ 人間は誰かを愛するやいなや、相手に自分を傷つける権利をも与えるものだと君は思ったのだらうか？ そうした理性的な仮説を君は蔑んだ。君によれば、迷信深いモロ、恋に恋したのは死であった。揺籃の中で恋を殺してしまったのさ。おそれるあまりに君は、それを死と呼びおおせなかった。「あの女」とか「幻滅をもたらす女」と君はそれと呼んだ。

君は恋おき男だ、モロ。けれど「あの女」は容赦なく君を幻滅させた。ロマンスが生ずるやいなや、君はそれをうしないはじめる。手始めに君は欠陥を目にし、それから欲望までもが消えうせる。愛が指のあいだをすり抜けるのに長くはかからない。一夜金持ちになった夢を見て、貧しいまま目覚める者のように。

幾度となく君はこころみた。メキシコではオクタビアと、先入観に毒されていないハリスコ出身のあの若い娘と婚約しさえした。それまでのどんな女よりも愛していると思ひこんで。結婚の日取りを整え、トラケパケの街角という街角に告示を張り出した。すべては「あの女」の腕をねじ伏せることができるかを確かめるために。無駄だった。自分の描いた絵とすこしばかりのものを携えて、夜中に君は逃げださなくてはならなかった。呼吸もできない息苦しさ、すっかりおおい被さる雪崩が降りかかってくるかのように、君を押しひしぐ切迫感が襲いかかってきたんだ。

その愛からの逃亡（あるいは、おなじことだが、君の恋に恋する死からの逃亡）のなかで君はできるかぎり遠くに行くことを考えた。男爵の忠告に耳を貸すことなく、アメリカ大陸の熱帯地方を後にして、赤道のさらに南へと下っていくことにした。遠く離れたチリにまで。自分のおそれを受けいれることができずに（モロ、君はブライドが高くもあったからだ）、君はフンボルトの権威主義的な助言に反抗するためにそうしたのだと自分に言い聞かせた。そうして彼との関係が壊れてしまえば、君は（写真ではなく）感性の画家になれるのだ。とはいえ、その悪魔を「あの女」ほどおそれていないことはよくわかっていた。義務の悪魔からは、あるいは逃れることができたかも知れない。だが、「幻滅をもたらす女」からは、誰が君を守ることができただろう？

「あの女」から身を守ることはできて、モロ？ それを聞くのは、わたしが受けとったばかりの（もしかすると五十年ほど前に受けとっていたのかも知れない、今ではわからないわ）、あなたの最後にして長大な手紙のなかで心臓が悪いと知らせてきたから。回復の望みがないということをおたしに理解させたから。そし

てすぐさま、あなたは結婚するつもりだと冗談を言う。死の間際にあつて結婚することを考えていると。誰にあなたが理解できるというの？ そのうえ、相手は二十歳の娘ときたわ。あなたより三十歳以上も若いんですって。ああ、モリッツ、愛しいモロ！ 悪い癖が出たのね、旅する画家さん？ また土地ごとの女を描くつもりなの？ そして収集するのかしら？ けれど、わたしがおばあさんなら、あなたはメトシエラ〔ノアの洪水以前のユダヤの族長で九六九年生きた〕……。すくなくとも、あなたは半世紀も前に死んでいた。この最後の手紙をわたしに宛てた後で。

迷信深いモロ、逃避行の不安を唯一鎮められるのは描くことだった。だからこそチリに着くやいなや、逆行する海流、獐猛な嵐、怪物じみた山といった凶兆について考えないために、デッサンをしながらバルパライソの港に入ったんだ。

アンデス山脈の白い山並み、湾を囲む小高い丘の円形劇場、剥きだしの、あるいは緑の山肌に穴を穿つ色彩を持つ家々、入江の両端に立つ荒れはてた要塞、真っ黒になった丸太組みの埠頭。デッサンをしながら君はその景色のなかを進んでいった。いつだって君は遠近法の内側を旅して、深奥にある小さなものの大きさが近づくにつれ増大していくのを生身の経験として感じるのが好きだった。それは間近に迫る死が巨大になるのとまったくおなじ。無から生じた愛が熱情に変わり、(逃げだす瞬間に消えうせるまでは) ほかのいっさいに對してわれわれの目をおおってしまうのとおなじ。今景色がそうしているように、君のさまざまな遠近法はこの場所で作容することになる。だが、君はまだそのことを知らない。

半ばマストの折れた船は湾の中央に投錨した。草の舳もやの綱が降ろされ、ふたりの漕ぎ手が操る舢舨はしげぶねがそれにしっかりと固定された。乗組員はロープを使って取り扱いに注意を要する包みや郵便、旅客の荷を降ろしはじめた。うねる波や嵐が残した残骸が操船を困難にした。パイロットラダーが降ろされるのを待ちきれず、君もまたロー

プを伝って降りた。嵐に打ちのめされて悲惨な姿となったその船を一刻も早く後にしたかった。またいっぽうで、船の先に立ち自分の荷物を自分自身で受けとりたいたいとも思っていた。トランクにイーゼル。筆に絵の具を用意するための油と顔料の入った箱。薄い上質紙を入れた紙挟み。そして片時も手放したことの無いあれらの絵を巻いて入れておく革でできた長い筒がたくさん。ようやくにして船は人と荷物を満載にして、左右に揺れながら船を離れた。ふたりの漕ぎ手はアシカのように錆色の肌をした、短い足と巨大な胴を持つチロエ島の間で、船を埠頭へと向かわせるのに超人的な努力をした。埠頭は黒や茶色の藻におおわれた杭に支えられた長い構造物で、海岸から湾に突きでいた。最近世界との交易に開かれた南アメリカ大陸のそうした港に特有の活気に満ちあふれる、折れ曲がった腕の形をした棧橋。

君が乗った船は突堤の二十メートルほど手前にとどまることを余儀なくされた。場所がなかったのだ。埠頭はコンテナと袋で埋めつくされていた。着岸できる場所はいずれも、数すくない荷揚げクレーンを使ってゆっくりと荷を降ろす小舟に占拠されていた。嵐は他のおおくの船をも遅らせたために、それらに対応するべく埠頭は目が回りそうな忙しさだった。

モロ、君は船の船先に立った。その景観の何ひとつとして見逃すまいと。インディオやアジア人の沖仲仕、海南が船に補給をするために二十もの言語で怒号を交わしていた。瘦せおとろえた水夫たちは頭陀袋を肩にかけて埠頭によじ登り、岸から宿に彼ら呼びこもうとハンカチを振って金切り声を上げる娼婦たちの喧噪へと向かっていく。海産物、グアノ【海鳥の排泄物が堆積して固化した、もの。肥料などとして用いられる】、濡れた大地の匂いが君を酩酊させた。

それらすべての色彩と香りの中、喧噪と怒号の真ん中で、君は初めて彼女を目にした。

背が高く、色の白い若い女。束ねていないまっすぐなその髪を一カ所だけ飾り櫛で留めている。太陽の下でまばゆい緑色をしたシルクのドレスは、おなじ色をした彼女の瞳の輝きをいやましている。注意深い瞳、好奇心が強く性急な瞳。巨軀で白髪交じりの黒人御者が、柄のある鞭を携えて彼女とともにあった。彼女の馬車は埠頭の

入り口で待つ一頭立ての小さなカブリオレに違いない。モロ、君はこうしたすべてを一瞥して認めたね。このう
えなく鋭い君の目はさすらう鷹の目（それとも遍歴の画家の目）。女にかんしては、ことのほか。そうだろう？
だが、いったいどうしたわけで港の娼婦すら足を踏み入れることを厭う雄々しき大海原の突堤に、その美しく
尊大な若い女は紛れこんだというのか？

ブリキのメガホンで拡声された港湾監督の怒号が君の注意を逸らした。港から離れろと叫んでいるのだ。そこ
を離れて海岸のそばに停泊せよと。そこなら荷を降ろす男たちとラバが胸まで水に浸かりながらもたどり着くこ
とができるだろうと。それは明らかに、もっとも危険な積み荷の降ろし方だった。この荒れた海で漕ぎ手たちは
座礁し、砂に乗りあげ、しまいには転覆の危険を冒しながら岩礁に近づかなければならない。あるいは、荷を降
ろすに際して波の上で下手をうてば、積み荷どころか旅客もまた海中に沈むことになるだろう。

舳船の船首に立ったまま、君たちの誰かが抗議するより早く、緑のドレスをまとった女が行動を起こすのを君
は目にした。十歩ほどはなれた場所から、肘まで手袋におおわれた腕を監督に伸ばして要求したのだ。

「あの船に場所を空けなさい！」

それは力強い指図。命令すること、服従されることに慣れ親しんだ人間に特有の、有無を言わせぬ調子で発せ
られた。埠頭のその場所で、いっさいは動きを止めた。屈強な男たちはひとり残らずその女に注目した。モロ、
君はどこにたどり着いたというのか？ 女たちが命令を下し、戦いに赴くアマゾネスの国だろうか？

若い女は、こんどは怒りを含んだ調子でおなじ命令を港湾監督にむかって叫んだ。髭面のたくましい男のほう
は敬意を表してか、そのような怒りを前にした困惑ゆえか、垢染みた帽子を取った。いっぽうの手にメガホンを、
他方に帽子を持って腕をひろげながら頭を振った。

時間のどちら側にあるとも、モロ、そのすぐ後に目にしたことをけっして忘れることはないだろう。若い女
は御者の手から鞭を奪うと、アジア人やインディオの沖仲仕のあいだを肘でかき分けて進み、一番近くに停泊し

ていた小舟の上に姿をあらわした。そして、羊毛の包みの積み降ろしを差配していた水夫に舳い綱を解いてそこを離れるように命じた。断固として動かぬ決意の男は、イタリア語訛りのフランス語で抗議した。握りこぶしのようにかつい顔を伏した男はコルシカ人らしかった。

躊躇することもなしに女は頭上から透明な空気の中で二度、その鞭を喰らせた。水夫はおおきな動きでかがんで巧みに鞭を避けた。当てるつもりがないことは明白だったとはいえ、女はその扱いに精通していた。

「場所を空けるの、空けないの？」女は食いさがった。

そして今一度鞭を振りあげると、それは蛇のように波打った。

時が止まったかと思われた。ただカモメの鳴く声ばかりが静寂を破っていた。

「^{フムドメルト}養女！ 頭のおかしいチリ女め！」

しまいにコルシカ人は激昂して、そう吐きすてた。その時まで嵐が残っていたうねりさえも、しばし静まったかのようなだった。

部下の水夫たちに向きなおると、船の舳い綱を解きオールを取るように命じた。ものの二分もすると、君の乗った舳船の漕ぎ手たちが接岸できるほどに遠ざかっていった。

その手際は水夫長やガレー船の監督もかくやという見事なものだった。もしこの埠頭が監督ののんびりとしたリズムによらず、あのように運営されるのであれば、生まれたばかりのチリ共和国はあつという間にその公益を増大させるだろうと君は思った。モロ、君は彼女を賞賛したいとさえ思った。

かわりに君は、舳船が係留されるあいだ腰を下ろしてクロッキー帳を開くと、今日にしたばかりの光景を木炭で素描した。波に揺られているにもかかわらず、その振動に助けられさえして、君は鞭を振りあげるその女の姿を三、四本の線で描きあげた。鞭を振りあげるに際して背筋を伸ばしたそのシルエツト、ふり乱された髪、きらめくその瞳、鋭い毅然としたその顔。そうした瞬間を記憶する生まれつきの才能が、モロ、君にはあった。いか

な電光石火であれ、君の脳裏には鮮やかに刻まれる。時間を細切れにして、過剰なものを和らげ、逃れ去るその線をとどめおく術を君は知っていた。

埠頭が上がった時、君は遠ざかる彼女の後ろ姿を目にした。彼女のもとにたどり着くには、沖仲仕たちをよけながらすこし走らなければならなかった。携えていた絵の道具に邪魔をされながら、衝動のうちに君は彼女の肩を掴んで足を止めさせるよりほかによい方法を知らなかった。

女は焼けた鉄で烙印を押されたかのように身をすくめた。そして、ふり返った。彼女の瞳、ドレスの輝きで強調されたエメラルド・グリーンの瞳は、頭のてっぺんから足の先まで君を不躰に眺めわたした。驚きのあまり、口につき言葉を持たなかったんだ。今では御者が手にしているが、もし彼女が鞭を持っていたならそれで君を打ちすえたのではないかと君は思った。

これほどの尊大さに痛快をおぼえた君は後に引いた。すこし息は上がっていたけれど、最大限の優雅さで君は言った。

「奥様、未来永劫にわたって感謝申しあげます」
セニョーラ

わけもわからず彼女は、眉を顰めて瞬きをした。

「感謝？ なぜですの？」

「埠頭に場所を空けてくださったことに對してです。描いてきたすべての絵とともに水の中に落ちていたかも知れません。感謝のしるしに、どうかこの絵をお納めください」

女は機械的に素描を受けとった。それを検めながら彼女は額から首まで真っ赤になった。血の波がふたたび彼女に火を点けた。鞭を振りあげる女の、怒りに満ちた美しさを君は捉えていた。そして、そのように描かれたことに彼女は戸惑っていた。君は得意をおぼえた。この国について間もないのに、君は印象を与えることに成功した。しかし、彼女は君を意気消沈させる。